喜多流　「一本松」

季　春　　番組順　四番目
所　陸前国高田松原　　稽古順　第三

シテ（前）普門寺の堂守　（後）一本松の精
ワキ　南部の僧　菅原某
脇連　従僧

次第　ワキ・脇連　平なる高田の原の磯馴松　高田の原の磯馴松
残して夢ぞ与うらん
ワキ　これは南部の国菅原の何某にて候　われ未だ海嘯の跡を
弔わず候ほどに　この度思い立ち高田の原を弔わばやと
思い候
道行　ワキ・脇連　朝霞　立つや緑の気仙川　立つや緑の気仙川
七坂八坂九坂　越えて十坂気仙坂
高田の郷に着きにけり　高田の郷に着きにけり
ワキ　急ぎ候ほどに　これははや高田の郷に着きて候
ワキ・脇連　これは如何なることやらん　街も並木も白砂も
覚えし景色はことごとく　瓦礫の山となりにけり
同音　哀れなりけり人々の　哀れなけり人々の　家も車も船までも
押し流されて奪われて　その上親兄弟や妻や子も
行方知れずとなりたるとは　口惜しや情けなや
げに恐ろしや大津波　げに恐ろしや大津波
ワキ　いかにそれなる堂守に尋ぬべき　事の候
シテ　こなたの事にて候か　何事にて候ぞ
ワキ　この辺りの津波の有様を詳しく　御聞かせ候へ
シテ　語って聞かせ申すべし本堂へ御入り候へ
語
さても平成二十三年三月　十一日の午後
一天　にわかにかき曇り
天地ざわめき大音あげて　地響き起これり
人々驚きてんでんに　逃げ惑うところに
黒波近づくとみるやたちまち防潮堤を乗り越え
家や車はあたかも滝壺に　落つるが如し
かくて　暴れ海は　一瞬にして高田の街と二千余名の
民を呑み込みたり　その様さながら　地獄絵図の如し
当寺は幸い高台にて　津波の難を逃れしが
運び込まれし十八人の　縁故なきご遺骨
その無念さたるや　如何ばかりなるらん
今はこの御霊が一刻も早く　家族と出会い
心安らかに眠らんことを　祈るばかりなり
お僧も懇ろに　弔い候へ　　中入

待謡　ワキ・脇連　いわれを聞けば　痛わしや　いわれを聞けば痛わしや
十八人のその御霊　未だ誰とも明かされず
帰る家さえ消え失せて　無縁仏となりぬらん
無念の跡を弔わん　無念の跡を弔わん
出端　シテ　遥かなる　東雲の空に差し出づる　陽に戸惑いて目覚むれば
友一本もなく　寒さ身に染む　一本松とは　現れたり
序　同音　かくて一本松は　生き存へたる嬉しさと
取り残されたる淋しさと
その上衆目にさらされたる恥ずかしさとが
入り乱れたる心の中こそ　哀れなれ
曲
そもそも松原は　江戸寛文の七年に　防潮防波の行く末頼み
赤松黒松取り混ぜて　六千余本を植え置きたり
シテ　げにや幾年月　小松若松栄え松　七万余本の磯馴松
同音　しかるに大津波
震度六とぞ思いきや　寄せる黒波引く土波
踏ん張ってよく見れど　周りに松は見えぬなり
在りし同胞はなかりけり
ロンギ　シテ　思えばただひとり　残りたりとは申せども
胸までも大潮に　襲われし身は末の松
同音　何と仰せある御身こそ　ただ一筋の光なり　必ず養生仕れ
シテ　有難の御事や　さあらば養生承り　友を慰み民支え
故郷の復興守るべし
同音　高田松原　夢の原　高田松原夢の原
白砂の弓浜は陸奥の楽園　その景観こそ
日の本の百景　陸中の自慢の青松の浜
シテ　されば一本残れる一本松の
同音　さればにや残れる一本松の　希望の光の願いをこめて
体内改め高田へ戻り　松白浜にぞ立ちぬらん
まつ白浜にぞ立ちぬらん